
この道を歩いて。

深月 人（しばいぬZ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この道を歩いて。

【Nコード】

N8523J

【作者名】

深月 人（しばいぬZ）

【あらすじ】

何も知らない少女のお話。

◆出会い（前書き）

思いつきで書いてしまったものです。。。すいません。

◆出会い

朝、私が目覚めたのはまだ山の向こうから光が漏れている頃だった。

今日も木と草と土の香りが私の小さな鼻を優しく撫でる。丸まって眠ったせいか、体の調子が今一つ良くない。

私はグツと体を猫のように反らせ、少ししかない筋肉を伸ばした。空は薄い紺色。雲ひとつなく空は少し寂しそうだった。

「今日はどこに行こうかなー」

私は早速、出掛ける準備をする。近くの川に顔を入れ、手で擦る。川はキレイで、周りには名前も知らない綺麗な花たちが咲き乱れている。そんなバラバラな花たちでも美しさを感じるのは、きっとこれがあるべき姿なのだからだと私は思う。

今までに、いろんな街を通り、決められた枠に均等に並べられた花たちを見てきたが可哀想だとは思わなかった。この花たちも私みたいに自由だったら良かったのに。

私が育ったのは孤児院。その孤児院での子供の扱いは酷かった、奴隷のように扱われ、名前すら与えてもらえなかった。

八歳になるまでは孤児院で何も言わず、ただただ大人たちの言う事を聞き、決められたルールを守り通した。

八歳の時の夏だった、私が自由になったのは。

夜、空の黒に火柱が飲み込まれて行き、孤児院は全焼してしまっ

た。
火事の原因は不明だそうで、先生は私たちをおいて、みんな実家のある田舎へ帰っていった。

一人でいることに苦しさを感じなかった私はこうして一人、旅に

出ている。

顔を綺麗に洗い終わったところで、今日の朝ごはんを取りに行こうと歩き出す。

この場所には果物がいっぱい生^なっているし、川には魚がいっぱいいて食料には困らなかった。

「あ、こんなところに林^{りんご}檣がある」

綺麗な宝石のように輝いている林檎に手を伸ばすが、木は高く、私の背では到底取ることはできなかった。

だがそんなことで諦めているようでは、生きてはいけない。

私は手に唾をかけ、木の枝に指をかけた。こんな事は毎日やっている。スルスルと林檎が生っている場所まで上り、持てるだけの林檎をもぎ取った。

下に降りたら、林檎の木を背に林檎を食べる。口の中に入れた途端、林檎の蜜の甘さが口の中を駆け回り、食欲が湧いてくる。

私はあっという間にその林檎を完食すると次の林檎に手をつけた。そんな時だった、木の奥が騒がしくなり、一人の男の人がこっちに走ってきたのだ。

「走れー！！」

男は私に向かって、何かを叫んでいるが距離があるためか、私には聞きとることが出来なかった。

すると、男の後ろの木が倒れ、いつもは頭を撫でも怒らないおとなしい熊が目の色を変えて走ってきていた。

呆気にとられ立ち尽くしていると男は私の手を引き、一緒に逃げてくれた。

これまでにないというほど走り、景色の木はドンドンと後ろに流れて行く。そんな光景を見飽きた頃か、ようやく熊が追いかけて来

なくなったのは。

二人とも木に寄りかかり座り込む。

「はあはあ、大丈夫か？ 嬢ちゃん」と知らない男の人は私の顔を覗き込みながら話してきた。

それに対して、私は沈黙で返す。

「おっと、すまねえ。俺はクランド・マイル、みんなにはクランって呼んでもらってる。で？ 嬢ちゃんの名前は？」

「名前？ 私は名前なんてつけてもらってないよ？」

本当のことを話したつもりだが、この男の人はどうやら信じていないらしい。

「名前がないって、そりゃあおかしいだろう、お母さんやお父さんはどこにいるんだい？」

「お母さんもお父さんもみんないないよ。おばあちゃんもおじいちゃんも、お兄ちゃん、お姉ちゃん、弟も妹もみーんないの」

男は無精ひげの生えた顎をさすりながら、難しい顔をしている。

「ということは、お嬢ちゃんはここで一人で暮らしているのかい？」

私は首を左右に振ることでこの事を否定した。

「暮らしてるんじゃないくて、冒険してるの、ここはその途中。ここはご飯がいっぱいあるから、今はここにいてるけど、もうすぐしたら新しい場所に向かうの」

「ほう、そうなのか。一人で寂しくないかい？」

「寂しくない」

私は即答し、走り疲れた体を持ち上げる。

「おじちゃんはずいとその小さな街に暮らしてるだけだな、嬢ちゃんも一緒にくるか？」

私なりにしばらく考え、行くことを決意した。

この綺麗な場所は森というところらしい、木がいっぱい生えていて動物がたくさん暮らしてる場所を森だと言っていた。

この素足で感じるふわりとした土の感触、足を撫でる草は少しむず痒く気持ちを楽しくさせてくれる。そんなことに夢中になりこげ茶色の眺めていると異変気がついた。

克蘭さんの足に何か変な物がくっついていていることに。

「ク、克蘭さん……」

「ん？　なんだ？」

「あ、足に変な物がついてるよ……？」

克蘭さんは、自分の足と私の足を見比べた後、上を向いて笑い始めた。

「え？　何が可笑しいの？」

私には全く訳がわからなかった。どうして良いか分からずあたふたと慌ててしまい。それが面白かったのか克蘭さんは笑い続けた。いた。

「すまんすまん、つい可笑しくてな。それに足についてるこれは靴っていうんだぞ？」

どうやらあの足についている黒い塊は靴というらしい。初めて見るものはとても新鮮で私にはとても楽しかった。他にも克蘭さんは私の知らないものをたくさん知っていて、村に向かう途中、いろんなことを教えてくれた。

しばらく進むと、さっきまで木の陰で遮られていた日差しが目に刺さる。

私は急な眩しさに目を瞑ってしまった。手を空に向け顔に影を作ることで私はようやくこの情景を見る事ができた。



森を抜けた先にはレンガ造りの綺麗な家が立ち並び、たくさんの子どもが笑い、はしゃぎまわっていた。

今までに通って来た村はこんな楽しそうな場所ではなく、沢山の人が飢えで苦しみ、はしゃいでいる子供など一人としていなかった。そんな光景ばかり見てきたせいかな私にはここがとても楽しく綺麗な場所に思えた。

「うわぁ……」この景色に見惚れて、つい、ため息混じりに言葉が出てきてしまう。

初めて見るものばかりで、私は走り出したくなる感情を抑えることはできなかった。

そんなとき、太陽の光が反射し、遠くでキラキラと光っているものが見えた。

それは今まで見た川や鳥、魚、木の実よりも格段と輝いており、近寄ってみたいという、この好奇心から、走り出さずにはいられなかった。

「綺麗な石だなあ……」

少し離れたお店に向かい、そこに並べられている綺麗な石たちを眺める。

さつきから感動してばかりだと自分でも思うけれど、仕方がない、本当に綺麗なのだから。

「お、嬢ちゃんどうした？ 飴を買ってくれるのかい？」店のおじさんに話しかけられる。

「飴？ なんなの？ それ」

「ほう、嬢ちゃんは飴食べた事ないのかい。今時珍しいねえ。ほれ」

そう言って、店のおじさんは私に血の結晶のような綺麗な石を一つ摘み、私の小さな手のひらにそっと乗せてくれた。

「ほら、嬢ちゃん、口に入れてみな」

「これを？」

私は驚いて聞き直した。

どうやら、この綺麗な石を口に入れなければならないらしい。

正直に言うとは私は嫌だった、この綺麗な石をもっと眺めていたかったのだ。

私が口に入れようか入れないでおこうか迷っていると後からクランさんが走ってきた。

「ちょっとは待ってくれよ、すぐに走っていくんだから」

克蘭さんは慌てて追いかけて来てくれたのか、額には少し汗が滲んでいた。

「えっと、ごめんなさい。後、コレをおじちゃんが口に入れなさいって言うんだけど、石なんだから食べられないよね？」

もらったばかりの綺麗な石を克蘭さんに向ける。

「へえ、飴をもらったのか、よかったな」といい、やさしく頭を撫でてくれる。

頭を撫でられるのは初めてだったためか「えへへ」とつい頬が緩んでしまう。

撫でられた余韻に浸っていると、克蘭さんが話しかけてきた。

「ほれ、早く食わないと溶けて無くなっちゃうぞ？」
「え？ 無くなるの？」

私は慌てて口の中に放り込んだ。

口の中に入れた途端、今までに食べたことのない甘さが口いっぱいに広がり、つつい顔が緩む。

「甘くて、すごーいおいしい！」
「そうだろ、そうだろ」

正直なことを言っただけなのに、おじさんはとても喜んでくれた。ここは本当に良いところだと思う。みんな純粋で優しい。

「よかったな、じゃあ行くか」

克蘭さんは歩き出す。私は飴と言うものを舌で転がしながら、克蘭さんの背中を小走りで追いかけた。

暫く明るく元気な道を歩くと、一つの家が見えてきた。

「見えるか？ あそこが俺の家だよ」

少し遠くに見える、レンガ建ての家を指差しながら克蘭さんは言う。

「へええ、おっきいねー」

すると家から綺麗な女の人が出てくる。

「あ、克蘭、どこいったのよ。もうお昼よ？」

「すまんすまん、森であの子に会ってね」

克蘭さんは家から出てきた女の人となにやら話している。私のことを紹介してくれると言い、克蘭さんは女の人を連れてきてくれた。

「へえ、この子なの？ 森であったっていう子は……」

「そうそう、名前はないらしいんだよ。孤児なのかもしれんなあ」

二人は難しい話しをしている。口の中にある飴はもう溶けて小さくなってしまっているけれど、まだ、ほんのりと甘さが口を包み込んでいる。

それにしてもつまらない。克蘭さんはずっと女の人と話しているし、何もすることがない。

そんな様子に気がついてくれたのか、女の人が話しかけてくれる。

「あら、ごめんね。ずっと私たちだけでお話してて……。私はアイナよ、よろしくね。えっとーなんて呼べば言いのかしら」

「えっと……。なんでもいいよ？」

少し悩んだ様子で私の顔を眺める。しばらく見つめ合った後。アイナさんは口を開く。

「決めたわ！ あなた名前がないのよね？ 私がつけてあげる。んー、ミーナなんてどう？」

アイナさんはこんな私に名前をつけてくれた。急なことにびっくりしてしまったが、ミーナ……。可愛らしい名前だ。こんな幸せなことばかりがあつていいのだろうか。

私は頭を下げてお礼をする。

「ありがとう、この名前、大事にする！！」

とても嬉しかった。克蘭さんと出会ってから幸せが一気に訪れて来ている気がする。

もしかすると、これが私の一生分の幸せなのかもしれない。大事にしよう。ほんとに大事にしようと思う。

「ミーナか。良い名前じゃないか」

克蘭さんも私の名前を褒めてくれた。

その後も幸せな時間が続き、結局、今日は克蘭さん達のお家に泊めてもらえることになった。



「ほんとにあの子は純粹で良い子だ」

もう町は暗くなり、家の中は蠟燭達の頼りない明かりで暖かく包まれている。

そんな中、クランは思った。あの子が我が子なら、どれほどの幸せが待っているのかと。

「ええ、わかってるわ。ホントに良い子。最初に会った時から素直であの子の笑顔は少しの曇りもないわ」

アイナは思う、あの子が心配だと。このままここから追い出してしまつて良いのか……。

ミーナは隣の部屋でぐっすり眠っている。今日食べたご飯も、初めて食べた、こんなに美味しいもの食べたことがないと言ひ。口の周りが汚れるのも気にせずに食べてくれた。

「クラン、私は思うの。あの子をまた旅に行かせていいのかな……、って。だってまだあの子は子供よ？　今まで、ちゃんと生活出来てこれたこと自体が奇跡だわ」

アイナも同じことを考えているらしい。

この家だつて子供を安々と引き取れるような、そんな裕福な家ではない。しかし、こうやって一人の孤児を引き受けようとしているのだから、本当に私たちは浅はかなのかもしれない。

「君はこう言いたいんだろう？ あの子を僕たちで育てよう。って。それには僕は反対はしない、けど君のお腹の中にいる子はどうするんだい？」

アイナのお腹の中には既に生命が宿っていた。もう後7ヶ月もすればこの世界に生まれ、親の愛情を受け取って育ってゆくことだろう。

それを承知でアイナは言っているのか、これをどうしても確かめたかった。

「もちろん、そのことも考えていたわ……。それに関しては簡単なこと……、「二人とも幸せにする。」これが私の答えよ。きっと、この子だってわかってくれるわ」

お腹を撫でながら優しく微笑む。

アイナがここまで言ってくれているのにも関わらず、この言い様のない不安はぬぐい去れない。

しかし、こんな不安も一時の事だろうと胸の奥にしまい込み、この夜、僕たちは、この子達を育てることを決意した。



朝、昨日、はしゃぎ過ぎたせいか、体がまだ重い。

しかし残酷にも、窓から覗いている太陽は私の顔を照らすのをやめてはくれなかった。

「そろそろ、起きなさいよー」

水場の方から、アイナさんの声が聞こえる。

私はゆっくりと体を起こし、返事をした。

私はいつも空が明るくなる前に目が覚めるのだけど、今日はとても長く眠ってしまったみたいだ。

すでに太陽は真上の当たりまで登っており、ジリジリと町を焼いている。

昨日は家に泊めてもらったり、ご飯をご馳走になったりと、ごくお世話になってしまった。

少しくらいお礼をしておかないと、何か罰が当たりばちそうな気がするし、今日は一日、アイナさんのお手伝いをしようと思う。

お洗濯などは、孤児院の時に飽きるほどやらされたので、得意なほうである。

とりあえず、手伝いをするにも何をするにも、まずは用意をしないでは何も始まらない。

私は、顔を流して、眠気を吹き飛ばすために、町の井戸へと向かった。

井戸は、そう遠くにあるわけではなく、結構家から近い。

家を出て、数分もしないうちに井戸に到着する。

井戸の中の水は、太陽の光を浴びて、まるでガラスが散ったときのようにキラキラと光っている。

桶から両手で水を掬い上げ、顔にかける。

「ひゃあ、冷たいっ！」

自分でかけたばかりの水を払い落とす。

今日は暑いからか、井戸の水が一段と冷たく感じられる。

三度ほど顔を擦ったところで、完全に目も覚めたし家に帰ることにする。

「ミーナ、こんなどこにいたの？ 朝ごはんも食べないで出て行くから、心配しちゃったじゃない」

家に帰る途中で家の方から来た、アイナさんにばったり会う。
なにやら、アイナさんは私のことを探していたらしく、会ったと同時に、ぎゅっと抱きしめられた。

「んん、苦しいよ。どうしたの？」

顔を胸の中に沈めながら、そんなことを聞いてみるが、アイナさんは答えてくれなかった。

どうやら、アイナさんはすごく心配してくれていたらしい。ということがすぐにわかった。

言葉には出ていないが、目には涙が薄く溜まっており、何も言わなくても、すごく心配していたのだろうという事が読み取れたからだ。

「出掛けるときはあたしに一言言ってから出かけなさい！」と軽く怒られた後は、アイナさんと手を繋いで帰ることになった。アイナさんの手は暖かくて、冷たい井戸の水を触ったばかりの私の手には暖かすぎる温もりだった。

家に着くとすぐにご飯を食べる、もちろん朝ごはんは。

昼近くまで、寝ていても、お腹は、朝ごはんとは分、きちんと空くらしい、本当に良くできた体だ。

今日の朝ごはんは、パンとハムだ。

久しぶりにハムなんてものを口にした。孤児院にいるときは固くてボソボソしたパンだけだった。こんな物を食べたのは、いつ以来だっただろう……。

そんなことを考えながら、パンとハムを頬張っていると、扉が軋みながら開き、外の明かりが漏れ出してきた。どうやら、どこかに出かけていた克蘭さんが帰ってきたらしい。

その事に気がついたアイナさんは、すぐに克蘭さんに駆け寄り、「どうだった？」と何かを話している。ホントに仲がいいんだなあ。パンを頬張りながら足を揺らし、克蘭さん達を見つめていると、なにやら話があるらしく、食べ終わったら隣の部屋に来るようにと告げられた。

急いでパンを胃の中に押し込み、ミルクを飲む。最後に口周りを袖で拭い、隣の部屋へと向かう。

自分の背には、少し高めのドアノブを捻り、ドアを開く。

「お、来たか。ここに座りな」

部屋に入ってすぐ、ベッドの上に座っている克蘭さんに、横に来るようにと言われる。

断る理由は毛頭ない。逆に隣に来いと言われて、とても嬉しかった。

克蘭さんの隣に座ると、アイナさんも隣に座り、結果的に、私は二人に挟まれるような形になってしまった。

二人の体温が感じられるような距離。片方は固く、頼もしく。もう片方は柔らかく、何もかもを包んでしまえそうな感じ。

私の身体はこの幸せに耐えきれなかったのか、身体いっぱいの幸せを、ため息に変えて外へと逃がした。

アイナさんが私の頭を撫でながら、ささやく様に話しかけてくる。

「あなたは今は幸せ？」

こんな当たり前を聞いても仕方がないだろうというほどに、私の答えは決まっていた。

「うん、すごい幸せっ！ アイナさんも克蘭さんも優しくって、色々してくれるし、こんな風に接してくれたのはアイナさん達だけだよ」

そう言って、真実を告げる。過去にも街へ行ったことはあるが、孤児の差別はひどいものだったし。実際に街の子達に何度もお腹を蹴られて胃液を逆流させたこともあった。

そんな過去を思い出すと尚更、今の状況がどれだけ幸せなものなのかを痛感する。

「そうか、ミーナはこの場所が好きか？」

私の顔を見つめながら、今度は克蘭さんが質問してくる。

「好きだよっ！」

今度も即答。迷う余地などない。

「そうか……、なら僕たちと一緒に暮さないか？ ミーナ」

一瞬、この言葉が理解出来なかった。あまりにも贅沢。私には贅沢すぎる言葉だった。

「一緒に暮らさないか？」この言葉にだけは魔法がかかってるのは？　と思うほどの不思議な感覚。

お酒でも飲んで、酔ってしまったのかといった感じに、頭がクラクラと揺れる感じがする。

「一緒に……、暮らす？」

理解を求めようとして、確認をしてしまった。

「そうよ、私たちはミーナと一緒にここで暮らしたいの。ミーナが嫌でなければだけどね？」

嫌なわけがない。こんな幸せなような人達と暮らして、不幸になるわけがない。

しかし、こんなに一緒に暮らしたいにも関わらず、私の口は言葉をはっすることが出来なかった。

身体が自分の物ではないような気がする。もしかすると、これは夢なのかもしれない、という疑いすら抱いてしまう。

しかし、夢でも良い。

私はこの幸せを掴むために、いう事を聞かない身体に命令して、何度も何度も首を縦に振った。

「そうか」

私の言葉は通じたのだろう。　クランさん達は顔を緩ませ、私を抱きしめてくれた。

少し苦しかったけれども、二人の体温はそんなことも気にせず、強く強く、私の体を包み込んでくれた。

しょっぱい味がする……。

気がつく、私の目からは涙が溢れてきていた。

つらいことがある時はいっぱい泣いた。

孤児院でほっぺを殴られたとき、仕事がこなせなくて私の分だけご飯がなかったとき、友達が死んでしまったとき、言いつけを破り外で寝かされたとき。

沢山のつらいことで、涙は枯れてしまったと思っていたけど、私はまだ泣けた。枯れてなかった。

そんな涙の中、私は「ありがとう」を伝えた。

私は、旅を終えてはいない。

◆出会い（後書き）

駄文申し訳ありません。

これから精進していきますので、ご勘弁を。

誤字、脱字がある場合はツイッターでメッセもらえると助かります。
感想、評価もお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523j/>

この道を歩いて。

2010年11月15日09時59分発行